

## 書評

Randy L. Maddox  
*Responsible Grace*  
 —John Wesley's Practical Theology—  
 (Nashville; Kingswood, 1994)

清水 光雄

現在の私の座右の書となっているものが上記の 416 頁からなる大著『応答する恵み——ジョン・ウェスレーの実践神学』である。この書物は今後のウェスレー研究にとって如何に基本的な研究書であるかを述べてみたい。

マドックスは全ての人間に神から与えられている「応答する恵み」、つまり神の恵みに対する人間の主体的応答性をウェスレー神学を解釈する際の鍵と捉え、そこにウェスレー神学の特徴を見る。では野呂芳男氏のウェスレー解釈とどこが異なるのかと不思議に思う方々がおられるであろう。確かに基本的トーンは類似している。しかし両者の決定的相違は野呂氏がウェスレーを解釈する際、ウェスレーが置かれていた状況との対話を飛び越えて、直接ブルトマン等の実存論的視点から解釈する傾向があるのに対して、マドックスはまずプロテスタント・カトリック・東方の宗教諸思想が流れ込んでいる国教会の伝統を神学的基盤としていたウェスレーが、この伝統を如何に受け入れ、また対決しながら、彼固有の神学を産みだしていったかを、厳密なる資料と詳細なる分析を持って提示している点にあり、この点からいえば、ウェスレーの実存論的傾向と野呂氏が呼ぶリアリティーはウェスレーが国教会を通して学んでいたギリシャ神学者たちの東方思想ということになる。このマドックスの解釈は 1980 年代以降のウェスレー研究の動向を前提にしている。この研究動向を二点挙げるならば、第一は特にプロテスタント圏におい

ては、アルダスゲイト街での回心体験という出来事をウェスレー神学を解釈する鍵としてきたのに対して、若きウェスレーから晩年に至る神学的立場の変遷という、全生涯にわたるスパンで彼の神学を理解すること。第二は従来、ウェスレーはプロテスタント・カトリックという西方教会の文脈で解釈されてきたのに対して、東方の靈性を離れては十分に理解されないということである。

ジェニングスは 1987 年のアメリカの宗教学会で、1738 年 5 月 24 日のアルダスゲイトは本当にウェスレーの回心体験の時であったのか、いや、それは神話に過ぎないのではないかと問いかけた。つまりアルダスゲイトはウェスレーの生涯における決定的出来事であり、それ以前とそれ以後との間には断絶があると理解し、この回心体験をすべてのキリスト者の模範とするという、いわゆる「標準的な」アルダスゲイト解釈に対しての問いかけであった。ジェニングスによれば、アルダスゲイト前後のウェスレーの神学的テーマは一貫して聖化の追及にあり、アルダスゲイトは彼に人生を二分するような決定的変化をもたらさなかった。もしそのような人生の決定的時期があるとするれば、それは 1738 年ではなく、聖化の探究に生涯をかける決心をした 1725 年であるとした。このジェニングス発表の翌年の 250 年祭に当たる 1988 年において、アルダスゲイトの出来事のもつ本質と意義とを再検討すべきではないかという議論が起こり、マドックスの編纂による『アルダスゲイト再検討』(1990)なる書物が出版され、また、ジェニングスと同様な立場を取るマドックスと、「標準的」アルダスゲイト解釈の立場を取るコリンズとの、往復論争等がなされた。この論争はどの時期のウェスレーを重要視するか、つまりウェスレーの神学的立場をキリスト教の伝統のどこに位置づけるのかという、神学的位置に関する問題でもあったのである。

ウェスレーの神学的思想の変遷を三段階に分けて考えると初期(1733～38)、中期(1738～65)、後期(1765～91)ということになる。この場合、アルダスゲイトにおける回心体験を軸にしてウェスレーを解釈する研究方法は初期と中期との間に決定的な断絶を見、彼の重要な神学的確信は中期において形成され、それ以降、生涯の終りに至る迄、彼の神学的確信は基本的に変わらなかったとする。これに対し全生涯の視点からウェスレーを解釈する者

は初期から中期、後期への変遷におけるウェスレーの思想の成長、発展を強調しつつ、従来考えられていた以上に初期と中期との間には思想の連続性が、中期と後期との間には相違がより明白に見られるとする。

一般に、カトリック側からのウェスレー研究といえば、初期ウェスレーに焦点をあわした。若きウェスレーは大陸のカトリシズムの神秘主義者たちに深く影響され、キリスト者の理想的生活として聖化・完全を追い求めることを学んだ。この初期をウェスレーの生涯を決定した時期であるとし、アルダスゲイト体験以降もウェスレーは聖なる成長、キリスト者の完全、愛によって働く信仰を強調し続けたとする。特に、最近のカトリック研究者はウェスレーの先行の恩恵の教理を取り上げる。プロテスタントに欠如し、カトリックが強調している点は罪人なる人間の、神の恵みに対する応答性の主張、人間の普遍的救いの可能性の主張、あるいは、キリスト教徒以外の人々による良き業の承認等がある。これらのカトリックの主張とウェスレーの先行の恩恵の内容とは一致するといひ、あるいは、この先行の恩恵の教理は人間存在そのものを成り立たせる規定で、カール・ラーナーの超自然的実存規定 (supernatural existential) と同じである、更には、第二ヴァチカン会議における「ローマ教会とキリスト教以外の宗教の関係についての宣言」の趣旨とウェスレーの先行の恩恵の内容とは通低すると主張する。こうして先行の恩恵に基づいてドール、ハリー、ルービー等の最近のカトリック研究者は他宗教との対話の視点や万人の救いの可能性を積極的に取り上げる。

他方ヒルデブラント、セル等の従来のプロテスタント研究者たちによれば、初期ウェスレーに欠けていたものは原罪による人間の全的墮落と神の恵みによる一方的な罪の赦しと和解という、恵みのみによる義認理解であり、この理解は彼の中期において最も力強く主張されていたとする。この立場からすれば、ウェスレーのアルダスゲイト体験以前の神学的立場は知的主義、神秘主義、道徳主義、業による義、律法主義であると否定される。確かにウェスレーはこれらのプロテスタントの教えに影響されていることは明白であるが、同時に最近のカトリック研究者が主張する様に、神の恵みに対する人間の主体的応答性を強調する点で、ウェスレーは宗教改革者たちと異なり、彼らを強く批判していることも事実である。その意味でプロテスタント研究者はウ

ェスレー神学を幅広い意味でのプロテスタントの伝統の枠内で解釈する。例えばキャノンバルト主義とカトリシズムとのいずれの視点からの解釈をも批判し、神の一方的働きとこの神の働きに対する人間の応答性を強調した。しかしこの人間の応答性を神学的にどのように位置付けるかの問題がある。行為義認を極端に警戒し、義認以前も、義認以降も人間の行為の意義を認め難いプロテスタントの伝統内で、恵みへの人間の応答、救いにおける人間の働きを認めることは神人協力説 (synergism)、あるいはセミ・ペラギアンという名前で否定される。同様に、完全の教理を強調するウェスレーの神学は「プロテスタントの恵みの倫理とカトリックの聖の倫理との統合である」という、メソジスト内で広く受け入れられているセルの有名なテーゼはプロテスタント内では成立しないと批判される。なぜならこのテーゼは聖なる完全に向かう、人間の努力に基づく功績という考えを前提にするので、プロテスタントの聖化・完全理解はあくまでも義認との関係で語られるべきものであるから。従ってディシュナーはウェスレーの立場を「今日に至る迄のプロテスタント神学における新しい強調」と解釈した。そこでマドックスを初めとする最近のプロテスタント研究者はプロテスタント内で納まり切らないウェスレーの神学思想を、国教会の神学的伝統に流れている東方のギリシャ的キリスト教思想との関わりに求め始めたのである。

東方の霊性とウェスレーとを最初に結び付けたのはアウトラーである。アウトラーによれば、ウェスレーの特徴ある神の恵みに対する人間の応答性や完全の教理はラテン教父の伝統よりはビザンティンの霊性の伝統、特にニュッサのグレゴリオスの影響下で展開されているとする。このアウトラーの指摘に刺激され、1980年代に入ると、ウェスレーと東方キリスト教世界との関係が精力的に探究され始め、本書もその影響下で書かれている。

東方の視点から解釈する研究者はウェスレーの全生涯に鳴り響いていた説教のテーマを神の像 (Imago Dei) と捉え、その際、初期・中期の主たる関心は個人主義的、敬虔主義的であったが、後期の彼はこの神の像をこの次に限定せず、社会・経済・政治的次元、更には人間以外の被造物・自然・宇宙的次元をも含む全宇宙的スケールでの、終末的完成に向かう新創造という視点から理解し、このウェスレーの関心の起源は東方にあったとし、ここか

ら解放の神学やエコロジー神学、諸宗教の神学等の神学的対話の道がメソジスト内で開けてくるという。従って、1725年を「第一の回心」、1738年を「第二の回心」とする解釈や、ウェスレー神学を主に個人主義的、敬虔主義的視点から論じるコリンズや野呂氏等の解釈に止まらず、同様の立場をとるティリッヒや正教会神学者メイエンドルフ、教理史家ペリカンたちのウェスレー解釈も的を得ていないことになる。更には、回心体験を「標準的」に解釈することで、ウェスレーは社会的・政治的・経済的困窮問題を矮小化しているとするジェームス・コーンの批判も当たらないということになる。

こうしてマドックスは最近の研究動向を踏まえ、「応答する恵み」を解釈原理として、国教会に流れ込んでいるプロテスタント・カトリック・東方の諸伝統をポリフォニックに統合する、ウェスレー固有の神学を提示した。

書物の副題「ジョン・ウェスレーの実践神学」の背景を説明しておこう。ウェスレーの立つ国教会とはローマ・カトリックとプロテスタントが分離する以前の、4世紀迄の初代教会の信仰と実践とを権威あるキリスト教の模範とし、その復興を求めた。従って、ウェスレーはルター、カルヴィンよりもエラスムスを高く評価する国教会の伝統によって解釈される。この伝統を方向付けたエラスムスは初代教会の神学的形態である実践神学の積極的推進者で、神学的反省と宗教生活を不可避な関係で捉えた。つまり、初代教会では、神学はキリスト者の霊的生活とダイナミックに関わっており、神学的反省とキリスト者の生活との統合である実践神学が初代教会の神学形態であった。しかし中世になり、特にアリストテレス哲学をモデルとした学問体系は論理的完結性を神学に求めるようになり、その結果、その後のローマ・カトリック教会、プロテスタント教会、及び、プロテスタント・オーソドックスの西方教会の神学はこの論理的完結性に縛られ、実践神学は神学界で第二義的なものと見なされるようになった。これに対し、エラスムスを初めとする国教会は学問的神学と実践・霊的修練との有機的関係を重視する初代教会の神学的形態を回復したのである。つまり「ジョン・ウェスレーの実践神学」である。そしてこの実践神学は現代においては解放の神学やフェミニズム・エコロジー神学との対話へとわれわれを招いているとマドックスは解釈するのである。

最後にこの書物の目次を記しておこう。

Acknowledgement. Introduction.

- 1) Human Knowledge of the God of Responsible Grace.
- 2) The God of Responsible Grace.
- 3) Humanity's Need and God's Initial Restoring Grace.
- 4) Christ—The Initiative of Responsible Grace.
- 5) Holy Spirit—The Presence of Responsible Grace.
- 6) Grace and Response—The Nature of Human Salvation.
- 7) The Way of Salvation—Grace Upon Grace.
- 8) The Means of Grace and Response.
- 9) The Triumph of Responsible Grace.

Concluding Reflections.

(静岡英和女子短期大学教授)